

この点についてはもう少し言及がほしいものである。

さて、評者が最も関心を寄せたのは、著者の oxymoron への言及である。修辭的表現として見過ごすこともあり、またアウグスティヌスの思想を象徴的に言い表すものとして単純に総括的に理解しがちな時もあるが、著者はそれを「美の理論」構築の潜在的な基盤に据えているようである。美の観照における *invisibilis visio*, *deformis forma* における美の二重性、キリスト論で *coaptatio* を考察する機縁となった *infans Rex* などである。教会の歌声の美しさに感動しつつ、それを差し控える慎みの状況は、まさに *similitudo dissimilis* という人間的状況を示すものである。そこにアウグスティヌスの美の反省の特徴があるとすれば、著者が結論づけるように、美を強く愛求しつつ、時に *misokalie* をも引き込む人間の根本的な境位が「美の理論」として現れてくるという見方に対して共感できる部分は確かにあるのである。

尚、J.-M. フォンタニエ氏は、レンヌ大学のラテン語ラテン文学の教授である。ヴェルギリウス研究やラテン語哲学用語集の編集などの活動の他、アウグスティヌス専門書としては、*Lectures des Confessions de Saint Augustin*, Rennes, Presses Univ., 1999 がある。

渋谷 克美 著『オッカム『大論理学』の研究』

創文社、1997年、xiv+379頁

清水 哲 郎

著者は日本における数少ないオッカム研究者のひとりとして、長年に亘って研究を積み上げて来、スコトゥスについての研究や、ウッダムのアダムについての翻訳など、オッカム前後のイギリス系フランシスコ会修道士の思想状況にも目を配りつつ、オッカム『論理学大全 *summa logicae*』（邦訳では『大論理学』）を中心とした業績を上げている。本書は著者の80年代後半から90年代前半に発表した業績を基にし、それ以前の論文の内容を随所に織り込みながら、編成されたものである。

全体は4章から成り、オッカムの〈概念〉理解のオッカム自身における変遷（第1

章), スコトゥスの個体化の理論へのオッカムの批判 (第 2 章), *suppositio* (「代表」, 「代示」と訳されてき、著者は後者を採用している) の理論の歴史的発展のプロセスにおけるオッカムの位置づけ (第 3 章), オッカムの *suppositio personalis* の理論中の一つの問題についての議論 (第 4 章) と、オッカムの論理学体系の中での位置づけとしては、いずれも第 1 部 *terminus* (項辞) 論に属する諸問題をその順序に従って配列したものになっている。それぞれ、単なる紹介ではなく、先行諸研究に対する批判および著者の代案の提示を含んでおり、突っ込んだ議論を通して自らに先立つ時代および同時代の諸学者に鋭い剃刀をふるったオッカムに相応しい研究となっている、と評価できよう。その批判的となった先行研究のうちには、光栄なことに、評者のものも含まれており、評者としては本書をただ紹介するだけではなく、批判に答えるような書評を書くよう著者によって迫られていると感じさせられている。

第 1 章は、オッカムが論理学の対象の中核においている概念——音声や書ではなく、これこそが言葉の核だとされる——がテーマとなっている。これについてのオッカムの理解が『命題集注解』(*Ordinatio*: これには写本が二系統あり、その間でも理解の差が認められる), 『命題論注解』, そして『論理学大全』と、著作時期によって変遷している点が以前から指摘されており、その変遷の実態は、オッカム研究の一つのトピックになってきた。つまり、オッカムは概念について、より早い時期には *fictum* (いわば心の中に形成されるイメージのようなもの) と考え、理解する働き (*actus intelligendi*) がこれに向かうと考えてきたが、後には *fictum* を切り捨てて、理解する働きそのものを概念とするようになった (= *intellectio* 説) と見られるのである。著者は、これについて評者がオッカムにおける記号理解との対応を主張したのを切り捨て、より後の時期にオッカム自身が *fictum* を批判して行っている議論をも、オッカムの哲学に反するとして退け、「オッカムは実際には、*fictum* 理論の内に致命的な欠陥を見出し、それゆえ、この理論を棄てたわけではない」とする (23 頁)。では、*fictum* 説を捨てた真の理由とはというと、オッカムの剃刀の行使のみであるとし、かつ G. ガルの研究を援用してこうした変遷がオッカム独自のものというよりは、チャトンのグアルテルスの影響であるとしている。

本章の以下の議論は省略し、ここではまず、著者が、オッカムは *fictum* 説時代にも概念を記号として見ているとして、「(*fictum* は) 命題を構成する語であり、すべての事物を代示することが可能である」を典拠とするのは、評者への批判として有効

ではない、と答えておきたい。オッカムが初期から命題を構成するものとしての項辭の諸性質 (significatio や suppositio) の理論を携えていたことは当たり前のことであり、評者は指摘された典拠を当然知った上で、記号理解が途中から登場すると言ったのである。項辭の諸性質は以前から論理学の中に位置づけられてきたものであるが、他方、〈記号/signum〉についての論は、アウグスティヌス *De doctrina christiana* の系譜上のものであり、またオッカムが命題集注解において「全ての被造物のうちに三位一体の痕跡 (vestigium) があるか」という問いのもとで、vestigium と imago について論じたことと連関するものである (*Ordinatio* I, d.3, q.9)。そういう背景のもとで、「何かが何かの記号であるとはどういうことか」と考えるという視点は fictum 論の放棄と連関すると、評者は指摘したのである。連関して、評者の記号 I-II 理解への批判が、16 頁の注および 272-3 頁でされている。評者はこれについては相当以前に部分的修正をしているが、著者の批判はこれには影響されないと思われ、かつ評者は同意できない。が、これについては他日を期したい。

次に、著者が、オッカム自身がしている fictum 説批判をオッカム自身の哲学に反するとして切り捨てている点は、不適切であると思う。評者の理解するオッカムにはこれらの批判はまことに相応しいものであるが、それはともかく、簡単に切り捨てる前にオッカム自身の主張を整合的なものとして解釈する努力をもう少ししたほうがよかったのではないかと思う。例えば、オッカムの fictum 批判の一つは「概念が外界の事物を代示する記号であるためには、概念と外界の事物が、その存在方式において類似しているという前提に立っている」が、著者はこの前提が「オッカム哲学の基本的立場に反する」と評価し、ものとその記号の間は「存在方式において類似している必要は全くない」とする。ここで「野球の捕手のだすサインがカーブを表示する」が例示され、サインとしての指の動きとカーブとの間に類似は不必要であるとされる。だが、この議論は成り立たない。なぜなら、fictum 説は自然的に成り立つ表示関係についてのものであるのに、著者は規約によって成り立つ表示関係（これならば確かに記号とそれによって表示されるものとの間に類似がある必要はさらさらない）を引き合いに出しているからである。

おもしろいことに、著者はオッカムの fictum-intellectio 説の哲学的な意味について論じる際には、切り捨てたはずの評者の理解（拙著『オッカムの言語哲学』59-66 頁）に非常に類似した説明をしている（33-4 頁）。しかし、全く同じではなく、目の

前の本を認識しているという状況についての *intellectio* 説の説明として、「私が心の中に思い浮かべうるイメージとは、私がそれについて考えているという知性認識活動以外の何物でもない」という（評者だったら、ここで「心の中に思い浮かべうるイメージ」ということを持ち出しはしない）。著者自身のことばで語ろうとすると、最後まで「心の中のイメージ」という理解が残るという事実と、著者がオッカムに *fictum* 説を棄てる積極的な理由を見出さなかったということとの間には、おそらく密接な連関があるのだろう。

第2章「スコトゥスの個体化の理論に対するオッカムの批判」の柱となるスコトゥスの立場とそれに対するオッカムの提題の部分については、スコトゥス専門家の評価に委ねることとし、ここでは著者がオッカムの立場を「コペルニクスの転回」として提示する結論部を紹介しよう。著者は、「個物を成立させる根拠として普遍的原理を想定し」、その側から個物を理解するのではなく、「個物をまさに個物そのものの側から、それ自身によって存在するものとして理解する」とオッカムの立場をまとめた上で、「こうしたものの見方の転換」をコペルニクスにおいて起った転回に喩えている。ここまでは常識的見解であろう。さて、著者はここから進んで言う——「我々のまわりには、多くの事物が個として存在している。それらのものを認識する過程のなかで、我々人間の知性はそれらを一まとまりに捉え、普遍的な概念を形成し、それを多くの事物に述語づける。オッカムによれば、我々人間の知性が普遍的概念を形成する以前においては、如何なる普遍も存在しないのである。かくして普遍的な原理が、心の外から、認識する者の心の中へと移行する（116頁）」。そうだろうか。これはオッカム理解としていくつかのおかしい要素を含んではいしなないだろうか。一つは、個物を認識する過程、普遍的な概念が心の中で形成される過程についての理論がオッカムにあるのかのような語り方にある。もちろんトマスやスコトゥスにはそういう理論があるのだろう。だが、オッカムにおいては、論理学においても、認識について語る時にも、はじめから概念ないし語を前提した上で、「この人」という語の認識とこの人という対象の認識とを一つのこととして語る。そのような語りは「人」という概念が認識の過程の中で形成されるといった話とは齟齬をきたすのではないだろうか。また一つは、「人間の知性が普遍的概念を形成する以前においては、如何なる普遍も存在しない」と言ってしまうと、創造者である神のことばについての配慮がなくなってしまうのではないか、という点である。確かに著者も指摘するように（114頁注1）、オッカム

は創造に先立つ神の内なる普遍を否定する。だが、神は将来創造しようとしている諸個物を、まだそれらが生成していない時点において明証的に認識しているとも主張している (*Ordinatio*, I, d.35, q.5)。そうであるならばそうした個物の認識のために、神は神的事を携えている必要がある (オッカムは人間において成り立つ認識と、天使や神のそれとを平行的に考えている)。また、ことばによって創られたからこそ、世界の諸個物は整然と分類できるようなものとして存在しているのではないか。つまり、世界の背後に言語的な構造を考える必要があるのではないだろうか。

以上、最初の2章の紹介とコメントで紙数が尽きてしまった。後半2章を含め、総じて著者の意欲的な議論の故に、本書はこの分野の研究者にとって多くの刺激を与えるものとなっている。本書の主張の一つ一つを吟味し、さらにその上に研究を積み上げる可能性がある。なお、著者はその後、『オッカム『大論理学』註解』(創文社)として詳細な注釈つきの翻訳を進めつつあり、現在第3巻(第II部:命題論)まで刊行が進んでいる。これを含めて、著者の努力に敬意を表したい。

「中世思想原典集成」(全20巻)

刊行完成に際して

——現代日本におけるその意義と挑戦——

宮本久雄

今回上智大学中世思想研究所(所長K.リーゼンフーバー教授)が中心となり、翻訳者168名を結集してここに「中世思想原典集成」(以下「集成」と記す)の訳業が成就したことは、本邦の中世哲学研究史上の記念碑的意義をもつと共に、他の宗教・哲学・文学・芸術・歴史などの諸分野にまで大きなインパクトを与えるものと信ずる。中世哲学の翻訳事業は他にトマスの「神学大全」(創文社)、「アウグスティヌス著作集」(教文館)、「キリスト教教父著作集」(教文館)、「ドイツ神秘主義叢書」(創文社)など多々推進されており旭日昇天の勢いにあるという印象を与え、各々連関して一つ